

沼津市若山牧水記念館

第42号 2009. 3. 15

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/

しみじみとけふ降るあめはきさらぎの
春のはじめの雨にあらすや ね水

しみじみとけふ降るあめはきさらぎの
春のはじめの雨にあらすや 牧水

当記念館の展示室に新しい半切が展示されている。牧水の長男旅人の夫人、いく子（榎本篁子当館館長の母堂）の伯父杉山金治郎の四男茂夫氏から寄贈されたものである。個人で持っているよりも、皆さんに見ていただいたほうが牧水も喜ぶだろうとお持ちくださった。金治郎が手に入れたものが茂夫氏に渡ったものだろう。生真面目な文字ながらも伸び伸びと書かれている。

杉山家の家業は、代々続く沼津市中心部 下小路町の染物店で、「下小路の紺屋」と通称されていた。いく子の父政吉は、金治郎の弟で、芸術的感覚に優れ、絞染の達人と言われていたが、三十三歳で亡くなった。父を早く失くしたいく子は、伯父金治郎の下で養育された。旅人の妹真木子と小学校、沼津高等女学校で同級生であったことから若山家との縁が生まれ、いく子は旅人と昭和十三年に結婚した。

作品は、大正十年三月に発行された第十三歌集『くろ土』の中の「二月の雨」十三首のうち一首で、大正八年、次女真木子がようやく乳離れをしようとする頃の作である。

この頃の牧水は多忙な日々を過ごしていたが、大正八年一月一日から三日までを千葉の犬吠崎に遊んだ後、珍しく二月余りを家で過ごした。一月に詠んだ「大雪の後」二十五首につづいて、二月に入って詠んだ作品が「二月の雨」である。時に牧水三十五歳。沼津へ移住する一年半ほど前の、煩雑な、そしてあわただしい日々の中のぽかっと空いた時間における作歌とでも言おうか。

半切の歌は、雪の後の春を呼ぶ雨を詠んだ一連の歌を代表するような作品である。「しみじみ」と軟らかく発想し、「きさらぎの春のはじめの」と押さええて、「雨にあらすや」と締める。「や」は、疑問ではなく、感嘆詞と捉えたい。

「二月の雨」十三首を見ると、一首目の歌は、
家の窓ただひとところあけおきてけふの時雨にもの読
み始む
で、二首目がこの歌。三首目は

庭くまにこほりつきたる堅雪に音たてて降るけふの雨
かも

である。

牧水はよほどこの歌が気に入ったらしく、色紙や短冊によく書いたようだが、半切は珍しく、当記念館にとつてありがたい寄贈であった。
(須永秀生)

今日こんの短歌にち

馬場 あき子



「今日の短歌」つていうと、皆さんが自分たちの歌じゃないと思うんじゃないか、という心配が私にあるんですね。ところが、現代つていうのは、たとえば竹山広さんとか岡部桂一郎さんなんていう人は、もう九十ですね。これらの人のごいことは、竹山さんなんかは六十代になってからの人でしょう。原爆を長崎で浴びて、原爆のことがどうしても苦しくて詠えない。詠おうとすると、あまりにありありと現実が目の前に迫って来て、三十年年ですか、やつと詠った『とこしへの川』つていう歌集が大変評価されたわけです。原爆を体験してから、既に三十年以上経っちゃつてる。それが評価されて、新人のように登場した時は、おじいさんだったんですよ。だけど、たちまちみんなの高い感動を生んで、その後、追空賞とか茂吉賞とか、詩歌文学館賞とか色々な賞を一手にお受けになった。

岡部桂一郎さんは、戦前から歌を作っていたが一時中断。戦後、個性的な若手が集まった「工人」の中心となって活動した。塚本邦雄さんなんかを中心にする前衛短歌に押されてあんまり評価されなくなっている時も、営々とし

ていい歌を作っていた。人の目つていうのはどうしても目立つところにばかり行ってしまう。前衛時代が過ぎ、その次に四十年代のレース編み世代つていわれた若者が出ましたね。それから俵万智を中心にする口語短歌の時代が開けますね。それから、今度は、インターネットとかメールなんかで交換し合う短歌の世界が開ける。例えば、穂村弘さんとか加藤治郎さんとか、そういう人たちを中心にした世界が開けるつていうと、岡部桂一郎の存在つていうのは、なかなか新しい評価として言えない。そういう中で営々と歌を作つて来て、何年前でしたか、八十年代半ばになって『一点鐘』という歌集で追空賞をとったのが手始めで、詩歌文学館賞、その他読売文学賞まで受けられて、今九十五歳位ですよ。そういうふうに、短歌つていうのは、今いい歌を作つたから、それがいいつてわけでもないんですよ。やつぱりそこに、営々と作り続けて来る時間の累積つてものがある。様々な時代をその人が克服して生きて行くつてところに短歌の年輪つてものが出て来るんですよ。

ですから、現代短歌、つまり今日の短歌つていうのは、今作つている小学校一年生から九十年代の人達まで含まれるとすると、皆さん自身が歌を詠う時、今日の短歌を作つているんだぞつていう自覚を持つことが大事だろうと思つて、こういう題をつけるんです。今様の新しい歌いまぢやうばつかりが歌じゃない。今日の短歌つていうの



岡部桂一郎 『一点鐘』

は、九十歳まで生きて来た人の今日観と小学校一年生の今日観とまるで違うのが当たり前で、どんな世代の人も、今日の短歌を作っているという自覚の下に作れば、やっぱりそれが今日の短歌になり得ると思うんですね。

午後には選評する、皆さんが日常作っていらつしやる歌は、私も全部拝見して、ああ、こういうことを作ってらつしやるんだなということが分かっていきます。そういう歌に比べると、ちよつと消化しにくい歌がいくつかあるかも知れません。しかし、たまには消化不良を起こすような歌を読んでみるのもいいんじゃないか。自分が思っている今日の歌と消化不良を起こすような今日の歌と、どこに落差があるのかっていうことを考えることが、今日っていう問題なんじゃないのかという気がするんですね。配布したプリントに書いてありますように、今日の短歌っていうのは、去年の十月から今年の九月

までに刊行された歌集を、これはまさに今日以外ではないでしょう、何冊か挙げてみたんです。プリントの最初に出てくる二首は、そういうものではまったくないんです。皆さんと同じような形で作っていらつしやる方の歌を二首だけ挙げてみました。新潟日報という新聞の投稿欄の選者を私がしております。新潟日報に最近投稿された中で、私がいとおもって選んだ歌を二首挙げてきました。ちよつと読んでみます。

湯殿より子ら転び出づビニールのカニとクジラと祖父を残して 渋谷和子

面白いですね。可笑しい時は笑っていいんですよ。人の歌の悪口を言ったのを笑っちゃいけないとか、あの講師は悪口言ってるけどここで笑っては失礼だ、なんてことは考えないで、可笑しい時は笑ってもいいんです。それから酷いことを言っても、その歌を愛しているから言っているんだと思ってくださいね。午後の場面になると、特にそれが酷くなる悪い性質が私にはあるんです。段々段々しゃべっているうちにシビアになって行って悪口雑言になることがあるんですけど、それはその歌と作者を愛しているからだと思つて、人が笑われているのに自分が笑っちゃ失礼だなんて思わず、可笑しい時は笑つて、作者自身も笑つて、一緒になつて笑つたり悲しんだりするのが、歌の批評のいい場面じゃないかと思うんですね。

この歌を読むと非常に面白い。湯殿から子供が転がり出て来る。これはお風呂に入れてもらつているんですね。で、もう上がつてもいいよつて言われて子供が転がり出て来る。ところが、子供の後にはお風呂場には何が残っているか。これが面白い。ビニールのカニ、それからクジラ。普通はクジラとカニつて並列しませんが、カニとクジラつていいものと一緒にしないですよ。カニとクジラはビニールの玩具だから、カニもこんなに大きかったかも知れない。クジラもこんなに小つちやかかったかも知れない。子供の世界でうれしいのは、カニとクジラが同じ大きさかも知れないということですね。遊園地なんかだと、子供が跨がれるクジラとかブタなんかの乗物が一緒に並んでいるのがあるでしょ。そういうのは、やっぱり楽しいと思うけど。子供の玩具つてのはクジラとカニを並列することができない。大人の知識では並列できないものが、子供の世界では並列されてる。その発見ですよ。それだけかつていうと、もう一つ並列されている。祖父ですね。カニと祖父が同列であり、クジラと祖父も同列である。そこん所が面白いですね。これは詩の世界です。作者が体験した現実には、カニとクジラと祖父が一列に並んでいる。そういう現実なんですけれど、現実がそのまま詩であるという世界がありますね。この歌の良さは、そんなふうに現実がその



佐佐木幸綱 『金色の獅子』

まま詩であるところにあるんです。よく見ますと、自分の周辺、生活の周辺にそのまま詩である現実があるんですよ。それを発見するっていうのが、我々の、歌人のひとつの仕事じゃないか。こういう現実を発見するとうれしくなるというところに、この歌の良さもあると思います。

ここで、佐佐木幸綱さんの風呂場の歌を思い出した人があつたとすれば、ちよつと手を挙げてください。ああ、一人いましたね。幸綱さんの歌は、

風呂場より走り出て来し二童子の二つちんばこ端午の節句

というんです。思い出した人は手を挙げてください。いっぱいいますね。これはとつてもいい歌です。そして、この歌と比べてみて歌の格がどっちが上かという、やっぱり幸綱さんの方が上だと思えますね。どうして上なのかと考えることが、皆さんが短歌を作る時に大切なこ

となんです。

幸綱さんの歌には、馥郁ふいくとした目出度さがある。男の子を二人持つている男親の目出度さはどこから来ているかというと、「転び出づ」っていうよりも「走り出て来し」に現実感がある。普通の言葉だ。「転び出づ」ってのは、ちよつと古臭い言葉になってくるわけです。「湯殿」より「風呂場」の方がいい。今感いまかんがある。「湯殿」ってのはちよつと古い言い方で、我々は普通「風呂場」って言っているんじゃないか。品位を、格調を保とうとして「湯殿より」って言ったかもしれないけど、今感のある「風呂場より」って言葉を使つた方がかえつていいんだってこともここで勉強できます。それから、「転び出づ」よりも「走り出て来し」の方が今感がある。「今日の短歌」を作る時は、こういう今感がある言葉、今の実感を呼び覚ます言葉の方が有利だつていうことがあります。

それから、「カニとクジラと祖父」っていうのは見事なつり合いがとれています。ここに一つのこの人の歌の現代意識があります。けれど、そういう現代意識なんかを取つ払ってしまった「二つちんばこ」っていうかわいらしき、まるで五月人形のおちんちんを見るような「二つちんばこ」っていう表現に品位があるんですよ。面白いでしょ。おちんちんを詠つても品格があるっていう場面があります。それがここん所にとつてもよく出ていて、「二つちんばこ」と「端午

の節句」っていうのがピッタリくつづくことによつて、親の息子を見るときに目出度さ、嬉しき、喜ばしきというのが出て来るんですね。渋谷さんのは劣つていないかという、とんでもない。ここにも非常にいい現代意識と、ある種の現代の猥雑感わうざくを面白く出しているっていうことです。しかも、そこには、そういうカニとクジラ、祖父っていうものを一線に並べた手腕というものがあつて。両方とも大変いい歌だと思えますけれど、微妙にこの二つの歌を対比しながら、「自分はどっちの歌から入つていくかな」っていうようなことも考えられますね。まず、このカニとクジラの方から入つて行くのがいいんじゃないかと思えますね。そして、何年かこういうことをやつていくうちに、自然と端午の節句の方が出て来るだろうと思えます。

その次は、

敗戦の夜に盆踊りせし村あり太鼓の響きに
安堵したりき 前川道子

「敗戦の夜に盆踊りせし村あり」これ、びっくりしました。「太鼓の響きに安堵したりき」っていう下の句にもびっくりしました。

ちよつと伺いますが、沼津で敗戦の夜に盆踊りの太鼓を聞いたことがある人は手を挙げてください。ああ、ないですね。私なんか敗戦の夜は、「電気をつけていいんだよ」って言われても怖くて遮蔽幕しやくがなかなかとれなくて、「取つていいんだよ」って言われて遮蔽幕を取つた電燈の

灯りの、多分六十ワット位だったと思うんですけども、あまりの明るさにびっくりしたんですね。今の若い人には分からないだろうと思います、この驚きは。

それで、私は敗戦の夜の電燈の明るさを知ってるんですけどね、何食べたか覚えてないんです。敗戦の夜に、何を食べたか覚えてる人いますか。いたら手を挙げてください。

『サツマの粉のスイトンです。』

ああ、サツマイモのスイトンね。よく覚えていませんね。

『はい、配給の大豆の茹でたのです。』

ああ、大豆のペタペタになったやつね。私も多分それだったろうと思うんですけども、明確には覚えていない。粉のスイトンを食べた人はきつとヤミの粉ですよ。だから、あんまり手を挙げられない。サツマイモのスイトンだから手が挙げたんですね。大豆だから手が挙げた。その他の物だったらきつとヤミのもんですよ。

で、そういうものを食べていながら電燈だけが明るくなった。私の家は全焼したんですけれども、焼けなかった向かい側のアパートで、若い者が出窓に座ってウクレレを弾いたんです。そしたら、どっかから「非国民！」って怒鳴る声が聞こえてね、「日本は負けたんだぞ！そんなものを弾いているのは非国民だ！」どつちがなんだかよく判らなかつたんですが、とにかく首を疎めてね、小さくなつていったことがあ

りました。

しかし、敗戦の夜に盆踊りをした。これを決断したのは誰だろう。村長さんかしら。あるいは、なんかそういう指導者がいたんですね。「盆踊りの太鼓を打とう。盆踊りができる人、やれる人は集まって来てください」っていう、そういう伝令だけは、あの頃、拡声器でうまく村中に行き渡つたんです。空襲警報を知らせる、あれがありましたからね。そうして、村で盆踊りをした。すごい村だと思いましたがね。しかし、

ちょうど八月十五日はお盆ですよ。そして、盆踊りというのは死者を慰める踊りじゃありませんか。戦争でどれだけの人が死んだと思いませんか。もしかしたら、この村の若者の半分以上は死んでいたかも知れない。盆踊りをするのは一番正しかったんですよ、敗戦の夜に。盆踊りをしようと言つたのは、誰だったんだろうと思うんですね。今の黒姫町、その頃は長野県柏原村という所だったそうです。そこに彼女は疎開して、十歳で敗戦の夜の盆踊りを体験したそうです。そして、その太鼓の音を聞いた時に非常に安らかな思いになつたというので、「太鼓の響きに安堵したりき」っていう下の句が出来た。都会者の私は、東京に住んで焼野原の中にいて、ウクレレの音に非国民と怒鳴る声を聞いて、首を疎めて小っちゃくなつていた。それに比べて、長野県柏原村、黒姫町には、なんとという素晴らしい村の指導者がいたのか。私は非常に感

動したんです。

この歌、カルチャーセンターの教室でやつたんです。そしたら、手を挙げて「私が疎開していた村も盆踊りをしました。」って言ったので、びっくりしたんですね。「何処ですか？」って聞きますと、「岩手県紫波町。その時は北上山地と呼ばれていて、非常に貧しい村でした。私もそこで盆踊りを十七歳で体験しました。」って言ったので、非常に感動したんですね。そしたら、また手を挙げた人がいたんです。

「私はそんなところではありません。私の家は医者でした。家に親戚みんなが集まって来て、お医者さんだから持っていた青酸カリを致死量だけ親戚中で分け合つて、これを飲んで今晩死のうか、明日の朝死のうかという相談をしました。七歳だった自分は、隣の部屋で親や親戚がする相談を寝ないで聞いていた。その時、誰かが「子供はどうしようか、子供を残して逝った時、誰が面倒を見てくれるか」、「アメリカが進駐して来て殺されるかも知れない」、「お饅頭を作つて青酸カリを入れ、子供にも食べさせて一緒に死のう」って言うのを聞いた時、「わあー」って泣き出しながら襖ふすまを開けて飛び出して行って、「お母さん、死にたくない。お母さんたちも死なないで」って言って、ワンワン泣いた」んだそうです。そこで親戚中全部が死ぬのを止めたんだそうです。「それで今日私がいいます。」っていう話を聞いて、これも感動してね、敗戦の

夜つていうのは大変だったんだ。忘れちゃいけない幾つかのお話を聞くことができたんですね。そういう話の後に、いきなり今日の短歌で、まさに現代の漫画チックな話をするのはちよつと変なんですけど、現代つてのは非常に漫画チックなので、小島ゆかりさんの歌を読んでみたいと思います。

まどろみののちの車内に異変あり向かひの少年、中年になる

分かりますよね。電車に乗って、ちよつとうとうとしてる内に、向かい側に少年が座っていたのが降りて、代わりに中年が入って来て座ったんですね。目が覚めてみたら少年だったところに中年が座っている。あらつーというんですが、でも面白い。ただ面白いかっていうと、少年老い易く学成り難しじやないけれども、少年もあつという間に中年になるよ、中年もあつという間に老年になるよつていう警告でもあるわけですね。面白く、滑稽で漫画チックだけれども、



小島ゆかり 『ごく自然なる愛』

ある警告が含まれている。そんなところに現代短歌の一つの面白さがあります。実際の場面は、ちよつと漫画的で考えさせるものがあるわけですね。この歌が載っているのは、「ごく自然なる愛」つていう歌集で、この人は愛というものを追求して詠つて来ている人で、まだ面白い歌がいっぱいあるんです。ここに書いて来ませんでしたけれども、こういう歌もあつて、身につまされる。

人の話を聴かぬ夫と地図読めぬわれと秩父のさくら見にゆく

人の話と言つても、作者のつていう意味ですよね。「人の話を聴かぬ夫」と「地図読めぬわれ」と。これも可笑しい。笑つてしまふんだけど、作者の言うことなんて聞いてないで、自分のことばかりしゃべっている夫と、地図が読めない自分とが一緒になって秩父の桜を見に行く。それで、地図が読めない方向音痴の作者が「あつちじやない？」と言つても、ちつとも聞かないで、「こつちだ、こつちだ」つて言う夫の後ろを付いて行くしかない自分。だけど、そこには、長年そうやって連れ添つて来た異質な女と男の人生つてものがほのかに感じられて、可笑しいけれども温かく微笑める。それが小島さんの世界なんです。皆さんは自分の夫婦関係つていうようなものをどんなふうにお詠みになるだろうか。夫だけ、自分だけ、また二人の間に、どんなふうなことを詠んでいくか。そこに、時間

のかかった夫婦の愛情みたいな、そんなものを読んでくださると、ありがたいですね。



日高堯子 『睡蓮記』

その次は、日高堯子さんです。これも現代そのものです。老人問題を詠んでるんですよ。

ぬくみのこるパジャマ・老斑・杖・お粥
かなしい順にまるつけなさい

「ぬくみのこるパジャマ・老斑・杖・お粥」みんな知っているものばかりですね。なんか悲しみがまとわつていきます。ぬくみの残るパジャマとか、老斑、手や足や顔に出てくるシミ、杖、お粥。その次がすごい。「かなしい順にまるつけなさい」つて言うんですね。こういう詠い方があるんですね。普通、「好きな順にまるつけなさい」つて言うんですね。だけど、「かなしい順にまるつけなさい」つて、どれもかなしい。人によつて作つてお粥が段々段々薄いお粥になつていくとか。杖も失くしちゃうので名前を彫つた杖にしたとか、花を杖の一番上に付けた

とか。だけど、その花は華やかだけど、実は物忘れする人に対する悲しい配慮なんだとか、いろいろあるわけですね。

「かなしい順にまるつけなさい」これは一遍読んだだけで分かる歌です。小島さんや日高さんの歌は読んですぐ分かる。しかも、なんか身に沁みる、そして考えさせる現代がある歌ですね。こういう優しくつて現代を含んでいる歌が、いい歌だと思いますね。

日高さんにも社会詠があるんです。去年から今年にかけて非常に有名になった「敗戦日」ですね。

敗戦日 空また晴れて日晒しの青姦のやうな日本も見ゆ

「敗戦日 空また晴れて」つていうので、今年も晴れましたけど、なぜか八月十五日はカンカン照りなんです。敗戦日 空また晴れての次は凄い。日晒しの太陽の下に晒されている「青姦のやうな」ですよ。そういう「青姦のやうな日本も見ゆ」これは凄いですよ。アメリカに「青姦」をされている日本。日晒しの真昼間はどうどうと原潜が横須賀に入港して来る。そして、思いやり予算が、老人の方に回って来ないで、みんなアメリカに行ってしまう。何兆円つていう思いやり予算で、アメリカ兵の家族が、ゴルフをするお金から、ボート遊びするお金から、遊園地で遊んでいる食事代まで払ってやつてる。そういう思いやり予算がどんどん払われ

ていて、老人の医療費ばかりが上がつている。後期高齢者だの前期高齢者から、どんどん取り上げて、年寄りも金持ちだと思われているんですよ。そういう懐からどんどん取り上げて、思いやり予算の方にはどんどん回っている。そういう時代。まさに「空また晴れて日晒しの青姦のやうな日本も見ゆ」つていう、こういう厳しい視点を持っている日高さんだからこそ、「かなしい順にまるつけなさい」つていうことが言えるんですよ。人間に対する愛ですね。人間に対する愛が無いところに本当の思いやりなんて無いんです。

敗戦日 空また晴れて日晒しの青姦のやうな日本も見ゆ

な日本も見ゆ
つていう歌と、
ぬくみのこるパジャマ・老斑・杖・お粥

かなしい順にまるつけなさい
つていうのが一緒にあること。こういう二つの



高野公彦 『天平の水煙』

面が詠える一人の人間。一人の人間が両方詠えることが本物なんじゃないでしょうかって考えます。

その次は、高野公彦さん。

こほろぎは一夜を低く鳴き継ぎぬ 月様まゐる、こがるるこほろぎより

「こほろぎは一夜を低く鳴き継ぎぬ」、ここまでは誰でも分かる。コオロギは一晚中鳴いている。うちの方でも鳴いています。コオロギが一晚中鳴いています。こんなところ誰だつて詠えます。当たり前、平凡だけど、歌つていうのは、そういう普通の誰でも詠えるところを下の句で逆転できる面白さがあるんですね。むしろ、

平凡なことを上の句に据えて置いて、次の「月様まゐる」つてのは何だ。江戸時代の花魁が「主様まゐる」つて書いたあれですよ。月様まゐる。「えーつと思うと、こがるるこほろぎより」。

ああ、コオロギが鳴いているのは、お月さまを恋しく思つて鳴いているんだ。なんか途端にいい雰囲気になった来たでしょ。こんな「主様まゐる」つていうような、花魁の手紙の宛て名書きを奪う「月様まゐる、こがるるこほろぎより」。なんか絵本の世界みたい。そういうものができるつてのは、これは今日の遊びですよ。今日ひとつ遊んでみようつていう時、ポエティックなこういう遊びもできますよつていうことなんです。だけど、この人もまた、こんな

遊びばかりやっていない。たとえばホームレスを詠ったこんな歌があります。

帽深き黒きホームレスゆらゆらと（真世がなし）のごとく広場ゆく

「真世がなし」っていうのは、沖繩の土俗的な神様なんです。沖繩の土俗的な神様は、頭から稲藁いねわらのようなものをかぶって蓑かさのようなものを着て、顔は絶対見せないで、杖を持って村中をゆらりゆらりと歩いて、丁度今頃、「真世がなし」は出るんですよ。来々豊年でもありますように、国土が安穩で豊作でありますように、世の中が全うでありますようにと祈って歩く土俗的な神様ですね。ホームレスをそれに譬えているわけですね。ホームレスを「真世がなし」だ。ホームレスこそ本当の全うな世の中を求めているんだっていう、そういう見方が高野さんにはあるのが分かります。ホームレスの形、形骸だけを「真世がなし」に重ねたんじゃない。ホームレスが求めているものを詠っている。それと、「月様まるる」っていう歌と一緒に詠える。一つの歌集の中に「月様まるる」と「真世がなし」がいうことが、私は高野さんの腕だと思うんですよ。その次、さつき言った岡部桂一郎さん。九十三歳。この方はもう車椅子ですけれども。薙ひげぎふせてまた遠ざかる竹の風 さびしくなつて小便をする

「薙ひげぎふせてまた遠ざかる竹の風」風が吹くと竹がさあーっと、こう一方に靡なましますね、それ

を言っているんです。竹の林が一方に靡く様子を言っている。その次は、人を喰ったようで面白いでしょ。「さびしくなつて小便をする」っていうんですよ。女の人じゃ駄目ですよ。男の人が小便をするっていうのは、そんな所からでするとこの頃は罰金取られますよ。だけでも、男の人の小便って、とつてもいい気持ちらしいですね。今はもう道端ですることができなくなつて、残念だと思つている人がいっぱいいると思うんですけれども。罰金さえなければ、あつちこつちで立ち小便したいのが男の人の通性らしいんですね。で、この人は竹の林を見ていた。そして薙ひげぎふせてまた遠ざかつていく竹の風の音を聴いていたら、寂しくなつた。寂しくなつたとき小便をしたくなるっていうところに、女の人とはちよつと質の違う男の哀しみがあるみたいで、なかなかいい歌じゃないかなあと思います。この人は、やっぱり哀しいんですよ。今、九十三歳。自分のずうつと貧しかった苦労した青春、非常に逼塞ひつそくして生きてきた戦中、それから認められずに悶々もんもんとしながら営々と歌を作つていた戦後。そういうことをずうつと考えていくと常に悲しくなり、寂しくなる性質なんですけれども、この人の歌にこんなのがあります。

白ほどの大きな月がいま昇る泣いているのか辛棒をせよ

白つたら大つきいですよね。今、白を知らない人はいっぱいいますから、「白ほどの大きな

月」っていうところで、この人の年齢が大体分かつて来る。昇り立ての月はこんな大つきいんだと。そういう大きな月が、豪華な月が濡れ濡れとして昇つて来る。それを見てると、小学生だったら生き生きとした姿に見える。我々だったら元気が貰える。だけど、この人はその濡れているような月を見て、泣いているのかつて問いかけている。自分の人生っていうものをずうつと考えてみる。終わりが近い人生を考えてみる。「泣いているのか」っていうところで、岡部さんの半生は非常に不運だったなあと思うんですけれども。その次の「辛棒をせよ」っていうのが入ってくるのが、泣かせますね。私はこの歌、大好きなんです。

まあ、辛抱（辛棒）ばかりの人生だったと思いますよ。我々位になればね、私だつて辛抱して来たんです。皆さんの中でも頭の白い人はみな辛抱して来たと思うんですけど。その辛抱をなるべく思い出さないうようにして、たまに「あの時苦しかったなあ、よくここまで乗り切つたなあ」と思い出す。岡部さんのように晩年に栄光を幾つか得ているのに、今は車椅子で、人手によつてやつと生きている九十年代というのが、「泣いているのか辛棒をせよ」というところに出ているような気がしますね。

その次は、時田則雄さんっていう北海道の人です。今は大農法ですから、すごく大きな土地を耕して生きている人ですね。北海道の大地つ



時田則雄 『ポロシリ』

ていうのは、ものすごく大きいわけですが、その大きさを頭に入れて読むと、この歌もなんかいいですね。

やはらかき風のほとりに佇みて聞きをり翁
と媪のささやき

もうアイヌのこういう人はいなくなっちゃった。ほとんどのアイヌは日本人に同化してしまつて、アイヌの面影は地名にしか残っていないですね。地名の然別とか月寒とか、明治の政治家たちは、そういうアイヌ語を全面的に残しています。当て字でもつて月寒と書いてツキサップと読ませたり、然らばの然という字に別と書いてシカリベツと読ませたり、長万部なんて難しいですよ。そういうアイヌ語を全部残した。そこに政治家の偉いところがあると思うんです。

時田則雄さんの歌は、どこも新しい言葉はないんですが、ここの「翁」と「媪」っていうのを「エカシ」と「フチ」とアイヌ語で読むことによつ

て、大きい北海道の大地を感じさせてくれるわけです。そして、その大きい北海道の大地に今は孤独に小さくなつてしまった「エカシ」と「フチ」の哀しみを感じるわけですね。日本人は単一民族などではありません。けしからん大臣がいましたが、決して単一民族ではない。時田則雄は「エカシ」と「フチ」のささやきを今も聞きながら、北海道の大地を耕させてもらっている一人です。

こういう言葉を見つかるっていうのも現代短歌、今日の短歌の一つの特色です。言葉を見つかる。たとえばさっきの「パジャマ・老斑・杖・お粥」。こういうのもそうですけど、「月様まるる」っていう言葉もそうです。それから「エカシ」と「フチ」という、これもやつぱり見つけられた言葉です。

時田さんの歌集は出たばかり。九月二十五日ぐらいの発行で、「ポロシリ」っていうんです。ポロシリっていうのは、大きな山っていう意味で、北海道の山のことなんです。この人の歌集は、技巧なんか全然ない。ほつぽり投げちゃつて、「技巧なんてごめんだよ」なんてくらい、現実に根ざしている。だけど、一気に読まれる情熱的な歌です。「最後の百姓の歌」と私は思いますね。お百姓の歌がなくなつちやつて来ている中で、この人が必死に働いているもの、凄じい情熱的な農民の歌、最後の百姓の歌だと思っています。この人もこの次はこれだけの情熱を懸

けた歌は詠えないと思う。時田さんの歌としては、穏やかな歌を挙げたんですけど、凄じい歌が並んでいます。ぜひ読んでほしい歌ですね。柏崎駿二さん、みちのくの人ですけれど、この人は一昨年『四十雀日記』という非常にいい歌集を出しました。私は好きで、あつちこつちでこの歌集はいい歌集だと言つたんですけど。梅の木の根元を掘りて亀を埋む花咲くときは亀を思はむ

普通の歌。だけど、なんだか金魚じゃこの悲しみ出ないんだよね。なぜかつていうと、金魚を埋めるのは小学生なんです、大体ね。夜店で賣つて来て早死にしたのを金魚のお墓なんて、子供がよく墓標を建てるじゃないですか。百合とか鳳仙花の根元に埋める。夜店の金魚は大体夏中に死んじゃうので、そういうところに埋めてやるんだけど、梅の木つていうと、これは恒久的なものです。毎年花が咲いて、毎年散る。そういう梅の木の根元を掘つて、亀を埋めて



柏崎駿二 『四十雀日記』

やった。亀ってかなり大つきいですよね。小っちゃいゼニガメじゃないと思いますよ。かなり大つきい亀。私の友達で四、五十年亀を飼っている人がいるんですけど、今、亀の歌を詠う人が非常に多いんです。亀の歌を詠ったことのある人は手を挙げてください。あつ、二人いました。今、亀の時代なんですよ(笑)。なぜかみんなが亀の歌を詠うの。どうしてかという手も足も出ないじゃないですか。そして、身を守るのにあの甲羅はシェルターみたいでいいじゃないですか。私も亀の歌をずいぶん詠っている。永田和宏は亀の歌をたくさん詠って亀の歌人って言われた。長生きだけれども、手も足も出なくて、いざという時にはシェルターの中に入っちゃう。今という過酷な時代をしのぐのに丁度のイメージがあるので、みんなが亀を詠ってますね。まあ、そういうわけですけど、「花咲くときは亀を思はむ」ってところで、非常に



永田紅 『ぼんやりしているうちに』

ごつつい亀が優しい思い出として残っている感じがして、大変素晴らしいと思います。その次の永田紅ちゃん、紅っていう字を書いて「こう」と読みますが、永田和宏の娘で今三十一(歳)過ぎたかなあ。科学者なんです。東京へ来て研究をしてたけど、今はまた京都大学の方へ帰っているようですね。これもやはり恋の歌、非常におとなしい恋の歌です。

忙しいほうが時間のあるほうをさびしくさせて葉を筆らしむ

分かりますね、ゆつくり読むと。忙しいほうが時間のあるほうをさびしくさせる。どっちが待つてるか。時間がたつぷりあるほうが「今日の十一時に待ち合わせて、ご飯を一緒に食べましょうね。」なんて言ったのに、忙しいほうがやって来ない。そして、なかなかやって来ないので、待つているほうが柳の葉っぱを筆(せ)つてる。そういう場面ですよ。忙しいほうが時間のあるほうをさびしくさせている。そして、そこに垂れ下がっている葉っぱを筆(せ)つて恋人を待つているわけですね。この人の歌にはこういう、相手をとつても思っている歌が多いの。

この人のもう一つの歌を読むと、

木の下をくぐりゆくとき撓る枝を押さえて
しばし手は待ちくるる

随分込み入ったことを詠っていますけどね。

木の下をくぐろうとした時、枝が撓(よ)っているの
で頭に引っかけちゃう。先にくぐって行った

恋人が撓る枝を押さえてくれて、その手が自分の通り抜けるまでしばらく待つていてくれただけで、こういう歌をゆつくりした調子で書いていると親切が身に沁みてくるような気がするんですよ。「忙しいほうが」と「木の下」って、同じタツチで詠ってる。相手の優しさ、親切さをゆつくりゆつくり味わうように詠んでいるところが特色なんです。

「忙しいほうが時間のあるほうをさびしくさせて」随分、散文的です。そして、あとは「葉を筆らしむ」って、自分が柳の葉っぱを筆(せ)つているんでしょうね。早く来ればいいなと思いつつながら、退屈で「木の下をくぐりゆく時撓る枝を押さえて」随分細かいですね、相手の動作が。自分が木の下をくぐって行く時、撓っている枝を相手が押さえてしばしの間、手は私が通り抜けるのを待つてくれる。相手と自分とのかかわりみたいのを随分丁寧に詠っていることよって、なんか優しさを味わっているような歌だと思えます。

終わりから二首目の、お父さんの永田和宏さんの歌を読んでみましょう。

どこでだって死ぬことはできる消火栓と壁
のあわいに蟬が仰向け

「どこでだって死ぬことはできる」。ああ、なるほど、そりやそうだよ。どこでだって死ぬことはできる。今日も、小田急線の線路に人が



永田和宏 『後の日々』

立ち入って十分遅れたんですよ。この頃、東京では線路に立ち入る人が多いんです。線路に立ち入るってどういうんでしょうね。要するに線路を歩いてるとか、線路に立ってるとか。死ぬうと思つて、降りるのは降りただけで、死ぬないっていうんでしょうかね。その気持ちも分かるけど電車は止まっちゃうので、何千人に迷惑がかかることなんです。あれは後ですごく罰金取られるんですけども、でも、死のうと思ふんでしょね。そういう人もいるし、ガス自殺だつてある。自然死もあるし、どこだつて死ぬことができる。この「どこだつて」つていうのは、そういう死じゃなくて、永田さんは若いから、イギリスへ行つても、山に行つても、あるいは船の旅の上でも、どこだつて死ぬことはできるから、死ぬ時死ねばいいやつて。こういうのは若い人が言うことですね。我々はそうもいけませんよ。やつぱり死ぬ時はうまく死ななきゃいけないので(笑)、考えちゃいますよ

ね。「どこだつて死ぬことはできる」と断言しておいて、「消火栓と壁のあわいに蟬が仰向け」つて、ああ、こんなところで蟬が死んでいますね。そういうふうには蟬が消火栓と壁の間で死んでいた。それを見て、どこだつて死ぬことができるんだと、元氣のある言葉として読んでいいんじゃないかと思ひます。しかし、それも言えない年齢もあるので、これを読みながら元氣が出る人も、そうでもないよと思う人もいるかも知れませんね。

それでは戻りまして、ちょっと難しい歌を読むことにしましょう。大滝和子さんという人の歌を読んでみたいと思ひます。

ぜおん観世音菩薩

皮むけばしろたえの梨あらわれる。なんだ、当たり前のこと言つている。皮を剥けば、茶色い皮剥いても、青い皮剥いても梨が出て来るのは当たり前なんだけど、「しろたえの梨」つていと思ひませんか？なるほど、こういう表現もあるなあ。「しろたえの」つて言われると、あのガリガリつとかじる梨じゃなくて、高貴な梨のような気がして来るから不思議ですね。千疋屋で買った上等の梨のようですね(笑)。まあ、そんなような梨が出て来た。丸が付いています。そこで一つ終わっているんですね。ああ、上等の梨だなあと思つた。その後には一角置いて、「ぜおん



大滝和子 『竹とヴィーナス』

んぜおん」つていうんで、なんだか呪文みたいだなあ。ゼウスの呪文とか、黒ミサの呪文じゃない。「ぜおんぜおん観世音菩薩」と来る。意外性といえは、凄く意外性。現代短歌は、こんなふうにな下の句と上の句の間に意外性を用意する。そういうテクニクがあります。一つのテクニクです。それじゃ言葉だけかというところ、「皮むけばしろたえの梨あらわれる。ぜおんぜおん観世音菩薩」と、祈りのように聞こえて来る。つまり、その白妙の梨が観世音菩薩であっても良いわけです。仏様なんて、棒つ切れを仏様だと思つて阿弥陀如来つて拝めば、阿弥陀如来になるかも知れない。林さんがいないから言うんですけど(笑)。そういうわけで、仏と思えば仏なんですよね。ここでは、その「しろたえの梨」つてところが、これが下の句に働くテクニクなんです。さう、「しろたえの梨」じゃなかったらダメなのよ。観世音菩薩になれない。

やつぱり、少し大つきな新高にいたかなんかのジャリジャリの梨が出て来ると、まずいんですね。長十郎の梨じゃ駄目なんですよね。「しろたえの梨」っていうのが、ある高貴性を感じさせながら、「ぜおんぜおん」っていう観世音の音を呪文のように使ったところに凄じおまじないがあるんですね。「しろたえの梨」「ぜおんぜおん」って言うついで、実はこれは観世音菩薩だったというところに香りが高いいいものを持っていますね。

この人の今度の歌集は、「竹とヴィーナス」っていうんですけれど、非常にいいものですよ。たとえば、日常手にとっている青梨だとか、あるいは大きい梨だとか、そういう日常的な食品を非常に深いところに持つて行く。これがとてもうまい。こんな歌があります。

わが影を川の水面みなもにあそばせて日輪という祖先せんぜんしずけし

「わが影を川の水面にあそばせて」こんなこと誰だつて詠う。しかし、川の水面に自分の影が映っているかと思うと、そうじゃないの。ずっと川の面をのぞいて見ると、そこにもう一つ違うものが映っているの。太陽が映っている。「日輪という祖先しずけし」ってね。もう、素晴らしいでしょ。「日輪という祖先しずけし」。こういうことを言える若い人がいるっていうことが、私にはとても力ですね。「わが影」の影は、日輪かも知れませんか。日輪は自分の影を川の面

に遊ばせて、これは我々のご先祖様だつて言っているわけですね。「日輪という祖先」っていうのは、やつぱり凄じ言葉なんじゃないかなあと思つて瞠目しましたね。四十代でこういうのを詠われちゃうと困っちゃうな。大きい歌ですね、深い歌ですよ。まだ四十九歳くらいじゃないですかね、こんなに深い鮮やかな、鮮やかでありながら深い歌を詠う人が出て来たんですね。素晴らしいことだと思ひ、頼もしく思ひます。



梅内美華子 『夏羽』

さあ、その次は、だんだん難しくなる。どこに行きましょう。梅内美華子さんの歌にしようかしら。これは、いまのいじめ問題を扱っているんですね。

はるかなるキリンの涙落ちてくるいちめに
自覚はないと聞くとき

こういうことはよく報道されますね。いじめられた子が自殺した。で、いじめた子のイニシャルが書いてあったので、いじめた子が判つてしまった。だけど、本人はいじめた自覚が全然

ないってことがありますね。「いや僕はむしろ好きだった。気の弱い、いいお友達だと思つて、とても好きだった。だけど、どうして自殺したのか解らない。」っていうようなことがありますね。

「はるかなるキリンの涙落ちてくる」。この「はるかなる」っていうのは、サバンナにいるキリンじゃなくて、キリンの首は長いでしょ。だから、キリンの首を見上げたとき、はるか彼方からキリンの涙が落ちて来るつて言つたんですね。だけど、キリンの涙つて落ちないですよ。嘘です。嘘ですけど、「はるかなるキリンの涙落ちてくる」っていうと、ポトツと落つて来るような、あの長い長い首の上から、ポトン、ポトンと落ちて来るような感じをさせる。

詩というのは、独断と偏見、嘘が入るもんなんです。リアルだけが詩ではない。嘘であるけれども、ある実感を伴うということ、リアリティを伴うということが大事ですね。「はるかなるキリンの涙落ちてくる」。そんな嘘をついたのは、何故かつという、「いちめに自覚はないと聞くとき」。いじめているものが、いじめているという自覚なくいじめているという。そして、それにいじめられて泣いている者、傷ついている者、不登校になっちゃう者、時には自殺する者。そんなふうになんの心を傷つけていながら、そのことにまったくの自覚がないという。そのことを聞いた時、作者である若い梅内さんの魂は、非常に悲しみに満ちて、遥かな遥かな向こうか



伊藤一彦 『微笑の空』

ら、キリンの涙が落ちて来るような、そういう
悲しみを感じたんですね。だから、「はるかなる
キリンの涙落ちてくる」ってのは感覚です。そ
んなような感じがする。「いじめに自覚はない」
と聞いた時に。こういう現実ってのは、どうし
たらいいんだろうかって悩んでいる三十歳代が
いるんですね。それがこんなふうな歌になっ
てきているわけです。まあ、ちょっと難しいつ
ていうか、感覚が分からない人がいるかも知れ
ませんけれど、私なんかにはよく分かる感覚な
んです。

それでは戻りまして、伊藤一彦さんの歌は、
ふるさとに長く棲みつ持つ帰心人には言
はず川にも言はず

っていうんです。難しいかしら。『微笑の空』と
いう歌集にありまして、今年の六月に逍空賞を
受賞した歌集です。その歌集の中にあつた歌で
すが、「ふるさとに長く棲みつ」。これは分か
りますね。故郷にもう長年住んでいるんだ。

それなのに自分はどっかに帰りたい気持ち
を持つている。故郷というのは帰り着くところ
なのに、そこに住んでいながらどっかに帰ろう
とする気持ちを持つている。それを人には言わ
ない、言っても解ってもらえないから。故郷の川
にも言わない。彼の帰ろうとする心はどこに
かかっているのか。これは、詩歌に携わる者だ
けが解る心ですけど、どこにいても絶えず詩に
帰りたい。どっかに自分が戻る詩の世界がある。

どっかに自分が帰る詩の世界がある伊藤さん。
年齢からいえば杜甫の世界だつて、李白の世界
だつていいんですよ。あるいはアメリカの詩人
の世界だつていいんです。けれど、ここでは、
帰る心を「帰心」と言つてますので、どっか東
洋的な感じがします。彼は西洋哲学をやつた人
なんです、この「帰心」はどこに向いている
のか。それは誰にも解らない。もつとも、彼に
はプラトンを詠つた歌がいっぱいありますから、
そういう西洋哲学のどっかのことを考えている
のかも知れない。けれど、故郷に住みながら
「帰心」を持つ。現実に家に住みながら、「帰心」
を持つということ、やっぱり詩人の魂そのもの
なんです。我々もどっかに自分の帰るべき
「帰心」を「拠点」を、常にどっかに憧れとして
持つているということが、大事なんじゃないか
と思います。

その次、魚村晋太郎さん。この人は四十代
の人で、塚本邦雄さんのお弟子さんですけども、



魚村晋太郎 『花柄』

非常に分かり易いといった点では、塚本さんよ
りずつと分かり易い歌です。

あなたが退くとふゆのをはりの水が見える
あなたがずつとながめてた水

散文的なので、場面をずうつとたどつてくれ
れば、誰でも分かると思います。あなたが退く
と、冬の終わりの水が見える。川でしょうか、
湖でしょうか、海でしょうか、なんでもいいと
思います。つまり、その人の影で湖が見えない、
川が見えないというような場合は、しよつちゆ
うあることです。それで、あなたが退けば冬の
水、川とか湖といわないで「水」といつたところ
が、一つのテクニクです。冬の水、冬の終
わりの水っていうのはどんな感じがするでしょ
うか。「ふゆのをはりの水」。暗くて濁つていて、
深い動かない水でしょうね。冬の終わりの水が
見える。それを見ながら作者は「あなたがずつ
とながめてた水」。これが大事なんです。あな
たは何故あの暗い動かないどんよりした水を

ずっと眺めていたのか。あなたがずっと眺めていた水。あなたは何を悩んでいたんでしょう。何を考えていたんでしょうという、その水を見ていた人への労りの深い問い掛けがありますね。そういう所にこの人の良さがあるんですね。「あなたがずっとながめてた水」。それで止まっているけれども、歌の余情としては、あなたは何を考えてあの水を見ていたのでしょうか。私もやっぱりあの水を見ながら考えたいと思いますよ。よってという共感もあるわけですね。



昭和研究会

雨の日の回顧展

加藤治郎歌集

加藤治郎 『雨の日の回顧展』

最後の一首

できたての裸の線があらあらと画帳を奔る、
あなたは河だ

加藤治郎さんです。デッサンしているんですね。モデルさんが前にいるんですね。モデルさんを前にして、裸のモデルさんを前にして線を生んでいる。線を生んでいくから「できたての線」。しかも、それは裸の線。分かりますね。できたての裸の線が、急いで書いているから、

あらあらと画帳を奔っている。その奔る線という言葉から、「あなたは河だ」と、モデルさん自身に向けて言う。あなたは河のような人だ。この河は爽やかな音を立てて流れる、そういう素早い瀬川、きれいな清らかな河のイメージが浮かびます。モデルそのものを「あなたこそ河だ」。新鮮なものを与えてくれる河だと言っているんですね。

加藤治郎さんは、名古屋の人ですけど、こういう暗喩、暗に何か表現しようとし、読者が読んで何かを感じてくれる。その感じてくれるものが大切だという、暗示的なもの、世界を表現するのが得意な人です。だから、こんな怖い歌もあります。

農婦はも胎児のごときパン生地を竈の中に
差し入れにけり

この「農婦」とは、どういう人でしょうね。農家の主婦でしょうか。しかし、「胎児のごとき」赤ん坊ですよ。パンの生地を丸めて、こんな大つきい胎児のようなパンの生地を「竈の中に差し入れにけり」っていうのは、怖いですが、赤ん坊を殺すみたいで、「竈」っていうところが怖いですね。竈の中に差し入れなければ、パンにならない。当たり前じゃないですか。だけど、「胎児のごとき」っていうのがあるので、なんか人間が犯してきた罪のような、人間が生きるために犯している罪悪のような、そういったものがほのかに感じられて来るところに、象徴的

な、暗喩的な、加藤さんの世界があります。まあ、この中で一番難しい歌かも知れませんが、そんなように、ごく普通の日常生活を写し取るということから暗示的な世界まで、現代の短歌は広がって来ていて、皆さんもその中のどれかのスタイルで歌を詠っているんだってことです。よ。じゃあ、どんな歌を詠っているのかは、午後には検証していきましょう。(拍手)

(本稿は、平成二十年十月五日に開催された「第五十五回沼津牧水祭・短歌大会」における講演録です。)

〈講師プロフィール〉 ばば あきこ

歌人、評論家。昭和三年、東京都生れ。昭和女子大学国文科卒。

昭和二十二年『まひる野』入会。二十三年から中学、高校教員を勤める。五十三年『かりん』創刊、以後主宰を務める。朝日歌壇選者、日本芸術院会員。

歌集に『早笛』『無限花序』『桜花伝承』『晩花』『葡萄唐草』『月華の節』『阿古父』『飛種』『馬場あき子全集』等。評論に『式子内親王』『鬼の研究』『和泉式部』『修羅と艶能の深層美』『歌話の世界』など多数。現代短歌女流賞、遼空賞、読売文学賞、毎日芸術賞、斎藤茂吉短歌文学賞、紫式部文学賞等を受賞。平成六年紫綬褒章受章。

第十九回 中学生短歌コンクール

平成二十年度の中学生短歌コンクールには、市内各中学校の協力を得て二千七十三首の作品が寄せられた。大変ありがたかった。

作品の審査は、沼津牧水会理事の青木朝子、杉山芳春、曾根耕一、星谷亜紀、須永秀生の五人が当たり、慎重な審査の結果、特選十首、入選四十一首が決まった。

〈特選〉

シャリシャリと母のむいてる梨の首台所から秋が近づく
第四中 原田みなみ

完璧に覚えたはずの三権分立模範解答何度も見直す
暁秀中 平田 伸一

ぼくじゅうをこぼしたような空になり光の竜がむこうで落ちた
大平中 宮沢 涼太

おかえりと一年ぶりに会う祖母はお花のようにむかえてくれる
第四中 市山 咲月

炭酸水浮かんで消える泡のごと儚くよぎる夏の思い出
第五中 杉山 絢菜

夏風が悲しい事実をもの語り平和を想う沖繩の海
第五中 森 帆乃未

高山病おして悪路をつき進む雲を抜けて見える頂
第三中 小松 堯弘

野田フジのつるが天へとのぼりゆくとどこかぬ空と知つていながら
第二中 大内 梨鈴

ふではこでぎゆうぎゆうになつてきつそう
なわたしの大事なシャープペンたち
愛鷹中 山崎真梨菜

ゆつくりと静かに流れて心地よいタイ語
使つて値切り楽しむ
大岡中 杉本 秀実

梨をむく母の台所から秋が近づくとというロマン。間違えるはずはないと思いつながら模範解答を確かめる自信と不安。稲妻を光の竜と見立てる思考が墨汁をこぼした比喻を生かす技法。「お花のように」の祖母への讃歌と花を歓迎するように迎えてくれることの二重構造。作者が意図して作つたかどうかはともかく、感心する限りであった。炭酸水と夏の思い出にもそれは言えそう。沖繩への思い。富士登山への感激。栽培種の野田フジの正式名を持つて来た功績。シャープペンを題材に取り上げて面白く処理をした工夫。そして、「ゆつくりと」がタイ語にかかる意外性から「値切り楽しむ」と展開の妙。

特選の歌のバラエティは積み重ねて来たコンクールの功と自賛しながら、「面白く楽しく選考をさせていただいた。入選の作品にも特選に劣らない作品が多くあった。幾つかを紹介する。

夏がまた終わったのだと感じてる病室の窓
うつらぬ花火
第四中 長島 千紘

大空はダイナミックな画用紙だ真っ赤にそめたり雲を描いたり
大岡中 加藤 美穂

新しい傘をさしたいが外は晴れてるてる坊
主逆さにして待つ
愛鷹中 笠原真奈美

流れ落ち地面をたたく汗の音 地球の危機
が身にしみる夏
大平中 久木崎透亮

応募作品の大半は、夏が暑い、部活を頑張る、花火、高原教室、修学旅行に集中していた。現在の中学生の関心のあり所として当然かもしれないが、全体に同じような内容で個性が感じられない作品が多く見られた。特選の作品、入選四十一首の内の抽出歌のような独自の視点の作品を期待している。
(須永秀生)



平成20年10月19日(日)第55回沼津牧水祭・碑前祭での表彰式

第十三回若山牧水賞に 日高堯子氏の歌集『睡蓮記』



写真提供 宮崎日日新聞社

平成二十年度の第十三回若山牧水賞は、日高堯子氏の『睡蓮記』（短歌研究社刊）に決った。授賞式は平成二十一年二月十二日（木）宮崎市の宮崎観光ホテルで行われ、選考委員の一人である馬場あき子氏の「牧水のリズム」と題した記念講演が行われた。翌十三日（金）は、日高堯子氏による「牧水―海と庭」の演題の受賞記念講演会が日向市東郷地区文化センターで開催された。

日高堯子氏は、昭和二十年現在の千葉県いすみ市に生まれ、早稲田大学教育学部国語国文学科を卒業。千葉県市川市在住。公立図書館に勤務する傍ら三十四歳のころ本格的に短歌を始め、昭和五十四年短歌結社「かりん」に入会、現在「かりん」編集委員。同人誌「鰻と水仙」同人。平成十六年に第五歌集『樹雨』で第三十一回日本歌人クラブ賞、第十四回河野愛子賞受賞。平成十九年に作品「芙蓉と葛と」三十首により第四十三回短歌研究賞を受賞している。

歌集に『野の扉』『牡鹿の角』『婁月もゆら』『玉虫草子』『日高堯子歌集』、評論集に『山上のコスモロジー』『黒髪考、そして女歌のために』がある。『睡蓮記』は第六歌集で、平成十八年から十九年までの二年間に作った四百三十首を収録している。

日高氏は「介護とか死とかいったものが急に現実を覆い、自分では世界が狭くなったように感じていた。しかし、逆にそれが人生の悲哀を歌うきっかけにもなり、だれにでも当てはまるテーマに仕上がった」と話す。

選考委員の岡野弘彦氏は「人物の置かれた状況に応じた適切な歌い方をし、知的に抑制を利かせているものの、中心には女性の情念がある男女の特徴を立体的で多様に把握した人間とらえ方が魅力で、骨格の強さを感じる。歌集の後半になると心の深まりを味わえる歌が増え、心を引かれた。」

佐佐木幸綱氏は「言葉を大切に作る日本語表現の楽しさが味わえた。実際に直接詠むのではなく、言葉の世界のこととして詠む、事実寄りかからない、歌い方は、現代短歌の一つの方向で、『睡蓮記』は、その水準をはるかに超えている。」

馬場あき子氏は「出会った物や事柄を繊細な感覚で受け止め、現代短歌が培ってきた女性の物言いを巧緻な言語表現で大胆に歌う。自身の過去の歌集に比べ、飛び抜けた出来。古典と現代語を違和感なく結ぶ技を身に付けている。」
伊藤一彦氏は、「どうしても言わずにはいられ

ない混沌とした心の内を高い技巧で表現し、独創的な世界をつくり上げている。全体的に知的さが土台にあり、短歌の伝統を踏まえ現代に迫ろうとする試みが見られ、これからのますますの活躍に期待したい。」

歌集『睡蓮記』からの自選作品十二首を紹介する。

奇妙なり 新月のやうにしづもりてくる身体
ありカルデラの底

そして脳はほの白い宵の花となりカルデラの上の月に酔ひにき

空をとぶ乳房もあれよはるばると雲がにほへば母ぞこひしく

黒フリルうつくしき秋の牡蠣を食む いのちの反りのよみがへる午後

母がため午後は葛湯をときませてあたたかさうなあの世をつくる

延命治療せずときめたる その午後の一万年の海のきらめき

はつなつの雲を映せるバスタブに母を洗へばほととぎす鳴く

水瓶のふちにとまれる黒揚羽どんなゆめから羽化してきたか

ふくふくと桃がならびぬ をとめからおうなまでたつた百年の夢

時間ふと薄わらひすることありてわれは川底の小石をひろふ

恋力いきのこりゐる黒南風のちかづくなかを葛の花ちる

光の画家モネのつかはざりし黒 黒とはあるいはことばかもしれぬ